

新訳グリム童話五編

— KHM一九、二五、二八、三四、五二 —

グリム兄弟・編
梅内幸信・訳

『漁師とその女房』(KHM一九)

むかしむかし、あるところに漁師とその女房がおりました。二人は、海の間近にある便所小屋のような家に住んでおりました。漁師は、毎日釣りに出かけ、釣りに明け暮れておりました。

あるとき、漁師は、釣りをしながら、キラキラ光る海の水を眺めて、ジーツと座っております。

そのうちに、浮子が水の中へ深く沈みました。竿をあげると、漁師は、一匹の大きなヒラメを釣りあげました。すると、そのヒラメは、漁師に言いました、「聞いてください、漁師さん。どうか、お願いいたします。私の命を助けてください。私は、ほんとはヒラメじゃありません。私は、魔法にかけられた王子なのです。私を殺して、それがあなたにとって、なんの役に立ちましょうか。食べたって、おいしくありません。私を水の中へ戻して、逃がしてください。」「さてと」と、漁師は

言いました、「おまえさん、そんなにブツブツ言わなくなつていいさ。しゃべれるヒラメなんぞ、わしにしたつて用はないさ。」こう言つて、漁師は、ヒラメをふたたびキラキラ光る水の中へ戻してやりました。すると、ヒラメは、あとに長い糸のような一筋の血を引きながら、海底へもぐつて行きました。そこで、漁師は、立ちあがつて、女房のいる便所小屋のような家へと帰りました。

「あんた」と、女房は言いました、「今日は、なんにも獲れなかつたのかい?」「ああ」と、亭主が言いました、「ヒラメを一匹釣つたんだが、そいつが、自分は魔法にかけられた王子だと言うもんだから、逃がしてやったよ。」「それで、あんたは、なんにもお返しをもらわなかつたのかい?」と、女房は言いました。「ああ」と、亭主は言いました、「お返しになにをもらえば良かったてえ言うんだい。」「やだよ」と、女房は言いました、「なんだつてやだよ。いつまでもこんな便所小屋のような家に住むなんてさ。臭くて、吐き気がするよ。せめて、小さな家でもお返しにもらえば良かったのにさ。さあ、行つて、そのヒラメを呼びだして、小さな家が一軒欲しいつて、言つてごらんよ。きつと、頼みを聞いてくれるわ。」「やだよ」と、亭主は言いました、「今さら、ノコノコ出かけて行くなんて。」「なんだい」と、女房は言いました、「あんたがそのヒラメをつかまえて、逃がしてやったんだろ。ヒラメは、頼みを聞いてくれるわ。さあ、行つていいよ。」「亭主は、あまり気のりがしませんでしたが、しかし、女房に逆らう気もありませんでしたので、海へ出かけました。

漁師が海辺にきてみると、海は、すっかり緑色と黄色にそまつて、もうキラキラと光つてはいませんでした。亭主は、岸に立つて、こう言いました。

「小人の、小人のティンペ・テさん、
ヒラメさん、海の中のヒラメさん、

わしの女房のイルゼビルがな、

わしの言うこと、聞かぬがな。」

すると、ヒラメが泳いでやってきて、言いました、「それで、おかみさん、なにが欲しいのかな。」「こまったな」と、漁師がいました、「わしがおまえさんをつかまえたんだから、なんだって、お返しをもらうべきだって、女房は言うんだよ。女房は、もう便所小屋のような家には住みたくない、小さな家が一軒欲しいって言うんだよ。」「うちへお帰り」と、ヒラメは言いました、「おかみさん、もう小さな家をもつてるよ。」

そこで、亭主は、家へ帰りました。すると、女房は、もはや便所小屋のような家の中にはおらず、そこには小さな家が建っていて、女房は、戸口の前にある長イスに腰をかけておりました。女房は、亭主の手を取って、こう言いました、「中へ入って見てごらんよ。やっぱし、こっちの方が、ズウーッといいわねえ。」二人が中に入ると、家の中には、小さな玄関と小さなすばらしい居間があり、二人のベッドが置いてある寝室がありました。それから、台所と食料貯蔵室があつて、そこにはいたるところ、上等な用具がそなえられていて、錫や真ちゆうでできた、みごとに道具など、必要なものはなんでもそろっておりました。うしろには、小さな庭があつて、ニワトリとアヒルがいました。それに、野菜や果物が植えられた小さな畑もありました。「見てよ」と、女房が言いました、「この家、いいんじゃない。」「ああ」と、亭主は言いました、「このまんま、満足して暮らすことにしようや。」「そりや、よく考えましょ」と、女房は言いました。それから二人は、食事をして、ベッドに入りました。

こうして、一週間か二週間は、なにこともなくすぎましたが、そのうち女房が言いました、「ねえ、あんた。この家も、せますぎるわね。それに、庭も畑も、とても小さいね。ヒラメは、きつともっと大きな家をあたしたちにくれることだっ

てできたでしように。あたしや、大きな石造りの御殿に住みたいのよ。さあ、ヒラメのところへ行つて、大きな石造りの御殿をください、つて言つてよ。「おめえ、なあ」と、亭主は言いました、「この家でもう十分じゃねえか。なんで、御殿なんぞに住みてえかなあ。」「まあ、なに言つてんだい」と、女房は言いました、「さつさと行つといでよ。ヒラメは、そんなこと朝飯前よ。」「いけねえよ、おめえ」と、亭主は言いました、「ヒラメは、わしらにこの家をくれたばかりじゃねえか。もうまた出かけるなんてこたあ、したくねえよ。ヒラメが気を悪くするじゃねえか。」「行つておいでつてんだよ」と、女房は言いました、「ヒラメにや、わけもないことだつてば。喜んでやつてくれるよ。さあ、行つといで。」亭主は、ひどく気が重くなり、行きたくはありませんでした。亭主は、「こりゃあ、まずいよ」と、ひとりごとを言いましたが、それでもやつぱり、出かけて行きました。

漁師が海辺にきてみると、海水は、すっかり紫色と紺色になり、灰色にごつてしまい、もう前のように緑色と黄色ではありませんでしたが、それでも、まだ波は静かでした。岸に立つて、漁師は言いました。

「小人の、小人のティンペ・テさん、

ヒラメさん、海の中のヒラメさん、

わしの女房のイルゼビルがな、

わしの言うこと、聞かぬがな。」

「それで、おかみさん、なにが欲しいのかな」と、ヒラメは言いました。「それがなあ」と、漁師は、なかば気をめいらせて言いました、「女房は、大きな石造りの御殿に住みたいつて言うんだよ。」「うちへお帰り。おかみさん、戸口の前に

いるよ」と、ヒラメは言いました。

そこで、漁師は、家に帰りましたが、もとの家に帰るものだとばかり思っておりませんでした。家に着いてみると、そこには大きな石造りの御殿が建っていて、女房が、ちょうど階段の上に立って、中に入ろうとしておりました。すると、女房は、亭主の手を取って、言いました、「さあ、中に入りましょ。」そこで、亭主は、女房といっしょに中へ入りました。すると、御殿の中には大きな入口の間があり、その床は、大理石で敷きつめられていました。そこには大勢の召使いがいて、大きな扉を開けてくれました。壁は、どこもかしこもピカピカで、美しい壁紙がはってありました。部屋の中にあるイスやテーブルは、残らず黄金でできていて、天井には、王冠の形をした水晶のシャンデリアが下がり、どの大部屋や小部屋にも、ジュータンが敷きつめられておりました。そのうえ、料理と最上等のワインが、テーブルがこわれはしないかと思われるほどまでに、その上の上のつておりました。建物のうしろに、大きな中庭があつて、そこには馬小屋と牛小屋があり、このうえもなくりっぱな馬車が何台も停っていました。大きくて、すばらしい畑もあつて、とてもきれいな花が咲き、おいしい果物のなっている木がならんでおりました。それに、半マイルの長さの遊園があつて、そこには、大ジカや小ジカ、ウサギといった動物のほかにも、いたらいいなと思う動物は、なんでもおりました。「ほらね」と、女房は言いました、「こちらのほうが、いいじゃないか。」「そりゃあ、そうさ」と、亭主は言いました、「このまんまで、いたいもんだ。このりっぱな御殿で暮らして、これで満足しようなあ。」「そりゃ、よく考えましょ」と、女房は言いました、「一晩寝て、考えましょ。」それから二人は、ベッドに入りました。

翌朝、女房が先に起きると、そのときちょうど夜が明けて、女房のベッドから、目の前にすばらしい景色が広がっているのが眺められました。亭主は、まだベッドの中で長長と寝そべっておりましたが、女房は、亭主のわき腹をひじでこずきながら言いました。「あんた、起きて、窓からのぞいてごらんよ。ねえ、国中を治める王さまになれないもんかねえ。」

ヒラメのところに行つてさあ、王さまになりたいって、言つといでよ。「あのなあ、おめえ」と、亭主は言いました。「な
んで、わしたちやあ、王さまになるんでえ！ わしゃあ、王さまになんかなりたくねえ。」「おや」と、女房は言いました、
「あんたが王さまになりたかあなくなつて、あたしゃあ、王さまになりたいんだよ。ヒラメのところへ行つて、王さまに
なりたいて、言つとくれ。」「まったくなあ」と亭主は言いました、「なんで、王さまにんかなりてえのかねえ。そん
なこたあ、ヒラメに言えやしねえ。」「なんでさあ」と、女房は言いました、「とつとへ行つといでよ。あたしゃあ、王さ
まになるんだから。」そこで、亭主は、出かけて行きましたが、自分の女房が王さまになりたいと言うので、すっかりう
ろたえてしまいました。「こりやあまずい、ほんとにまずいや」と、亭主は考えました。亭主は、行きたくはありません
でしたが、やっぱり出かけました。

漁師が海辺にきてみると、海は、すっかり黒ずんだ灰色になつて、海水は、下の方からわきかえり、ひどく腐った臭い
がしております。岸に立つて、漁師は言いました。

「小人の、小人のティンペ・テさん、

ヒラメさん、海の中のヒラメさん、

わしの女房のイルゼビルがな、

わしの言うこと、聞かぬがな。」

「それで、おかみさん、いったいなにが欲しいのかね」と、ヒラメは言いました。「よわつたなあ」と、漁師は言いま
した、「王さまになりたい、つて言うんだよ。」「うちへお帰り。おかみさん、王さまになつてるよ」と、ヒラメは言いま

した。

そこで、漁師は、家に帰りましたが、御殿にやってくると、それは、はるかに大きなお城になっていて、入口には大きな門があり、そこにはすばらしい飾りがついておりました。それに、番兵が扉の前に立っていて、またそこには大勢の兵隊がいて、太鼓やラッパも置いてありました。お城の中に入ると、どこもかしこも、ほんものの大理石と黄金でできていて、ピロートのテーブルかけには大きな黄金の房がついていました。やがて、広間の扉が開くと、そこには宮廷に仕える家来たちが、みんな集まっていて、漁師の女房が黄金とダイヤモンドでできた高い玉座に座って、大きな黄金の王冠をかぶり、手には純金と宝石でできた笏をもっておりました。女房の両側には、それぞれ六人の若い侍女が一列にならんでおりましたが、順順に頭一つ分だけ背が低くなっておりました。亭主は、歩みより、立ったままで言いました、「なんだなあ、おめえ、王さまになっちまったのかねえ。」「そうさ」と、女房は言いました、「あたしや、もう王さまだよ。」「そこに立つたまま、亭主は、女房を見つめました。そうして、しばらく眺めたあとで、言いました、「ほんとになあ、おめえ、王さまになつたおめえの姿は、なんてきれえなんだろな。もう、これ以上望むのは、やめような。」「あんだ、そりやだめさ」と、女房は言いましたが、とても落ち着きがありませんでした。「あたしやあ、いつも退屈で、もうこれ以上がまんどきやしない。ヒラメのところへ行つて、あたしや王さまだけど、今度は、皇帝になりたい、つて言つといで。」「おい、おめえ」と、亭主は言いました、「なんでまた、皇帝になりてえんでえ。」「あんだ」と、女房は言いました、「ヒラメのところに行つとくれ。あたしや、皇帝になりたいのさ。」「なあ、おめえ」と、亭主は言いました、「ヒラメだつて、おめえを皇帝にはできんよ。そんなこたあ、ヒラメに言えやしねえ。皇帝つてのあ、広い国中でたった一人しかいねえんだ。ヒラメだつてなあ、おめえを皇帝にはできんよ。できねえつたら、できねえんだよ。」「なんだい」と、女房は言いました、「あたしや、王さまで、あんだは家来で、あたしの亭主じゃないか。さつさとお行き。さつさと行つといで。ヒラメは、王さ

まにできるんだから、皇帝にだってできるわね。あたしゃ、だれがなんたって皇帝になるんだから。さっさと行つといでよ。」そこで、亭主は、しかたなしに出かけました。亭主は、出かけましたが、すっかり不安になって、歩きながら心の中なかで考えかんがえました、「こいつあ、まずい、うまくゆきっこねえ。皇帝になりてえなんて、恥はじ知らずなこつた。ヒラメだつて、しめえにゃあ、いやになつちまうだろよ。」

こうして、漁師りようしは、海辺うみべにやってきました。すると、海うみは、すっかり黒くろくにごつて、下したの方ほうからわきかえりはじめ、ひどく泡あわだちました。その上うへをもうれつな突風とつぷうが吹きわたると、波なみは、ひどく逆巻さかまきました。漁師りようしは、ゾォーッとしましたが、岸きしに立たつて、こう言いいました。

「小人こびとの、小人こびとのティンペ・テさん、

ヒラメさん、海の中のヒラメさん、

わしの女房にようぼうのイルゼビルがな、

わしの言うこと、聞きかぬがな。」

「それで、おかみさん、なにが欲しいんだね」と、ヒラメは言いいました、「こまったなあ、ヒラメさん」と、漁師は言いいました、「女房にようぼうがね、皇帝ていせいになりたい、つて言うんだよ。」「うちへお帰かえり」と、ヒラメは言いいました、「おかみさん、もう皇帝ていせいになつてるよ。」

そこで、漁師りようしは、家いえへ帰かえりましたが、家いえに着つくと、そこにはピカピカにみがいた大理石だいりせきでできた宮殿きゆうてんが建たつていて、あちこちに雪花石せつかせつこうで作つくった立像りつぞうがならび、黄金おうごんの飾かざりがついていました。門もんの前まえには兵隊へいたいたちが行進こうしんしていて、ラツパ

を吹いたり、大太鼓や小太鼓を打ち鳴らしておりました。さて、宮殿の中では、男爵や伯爵、公爵たちが、まるで召使のように歩き回っておりまして。この人たちが漁師に扉を開けてくれましたが、その扉は、純金でできておりました。漁師が中に入ると、そこには漁師の女房が玉座に座っておりましたが、その玉座は、黄金のかたまりからできていて、ゆうに二マイルの高さがありました。女房は、大きな黄金の冠をかぶっておりましたが、その冠は、二メートルもの高さで、ダイヤモンドとガーネットが散りばめられてありました。また、女房は、一方の手に笏をもち、他方の手には十字架つきの宝珠をもっておりまして。さらに、女房の両側には護衛が二列にたんで立っておりましたが、順順に背が低くなつていて、一番背の高い大男は、二マイルの大きさで、一番背の低い小人は、小指ほどの大きさしかありませんでした。女房の前には、大勢の伯爵や公爵が立っておりまして。亭主は、その中へ入って行って、言いました、「おめえ、今度は、皇帝になったのけえ。」「そうさ」と、女房は言いました、「あたしゃ、皇帝だよ。」すると、亭主は、もっと歩みよつて、立たまま女房をシゲシゲと見つめ、そうしてしばらく眺めてから、言いました、「なんだな、おめえ。おめえの皇帝の姿は、なんてきれいなんだらな。」「あんた」と、女房は言いました、「なんで、そこにつつ立ってるんだねえ。あたしゃ、皇帝だよ。こうなりや、法王にもなつてみたいわねえ。ヒラメのところへ行つといで。」「おおい、おめえな」と、亭主は言いました、「なんになりてえつて言うんでえ。法王にはなれねえよ。法王つてえのはな、キリスト教の世界の中でたった一人だけ。ヒラメは、法王にはできません。」「あんた」と、女房は言いました、「あたしゃ、法王になりたいんだよ。さつさへ行つといで。あたしゃ、今日中にも法王になりたいんだよ。」「だめだよ、おめえ」と、亭主は言いました、「そんなこたあ、ヒラメに言えやしねえ。うまくいきつこねえ。厚かますぎるつてもんさ。ヒラメは、法王にはできつこねえよ。」「あんた、なにをほざいてんだい」と、女房は言いました、「ヒラメは、皇帝にできるんだから、法王にもできるわよ。とつとへ行つといで。あたしゃ、皇帝だよ。あんたは、家来で、あたしの亭主だろ。行つといでよ。」そこで、亭主は、不安

になりましたが、出かれました。けれど、すっかり力がぬけて、体がブルブルふるえ、ひざがガクガクし、ふくらはぎがピクピクひきつりました。ものすごい風が陸の上を吹きわたり、雲が飛ぶように流れて、まるで夕暮れのようにうす暗くになりました。木の葉が木木から吹き飛びました。海の水は、煮えくりかえるかのように逆巻いて、波は、岸辺に打ちよせました。漁師は、遠くの方に何艘かの船を見つけてましたが、船は、救助を求めて、大砲を打ち鳴らし、荒波にもまれて、飛んだり跳ねたりしていました。それでも、空の真ん中には、まだちよつぱり青いところが残っていました。はじめの方は、まるで大嵐のときのように、ほんとに真っ赤になっておりました。漁師は、おっかなびっくり岸に立って、ビクビクしながら言いました。

「小人の、小人のティンペ・テさん、

ヒラメさん、海の中のヒラメさん、

わしの女房のイルゼビルがな、

わしの言うこと、聞かぬがな。」

「それで、おかみさん、なにを欲しいって言うんだい」と、ヒラメは言いました。「こまったなあ」と、漁師は言いました。「女房のやつ、法王になりたい、って言うんだよ。」「うちへお帰り。おかみさん、もう法王になってるよ」と、ヒラメは言いました。

そこで、漁師は、家へ帰りましたが、家に着いてみると、そこには大きな教会のような建物があつて、そのまわりはぐるりと宮殿に取り囲まれておりました。そっちの方へ漁師は、人ごみをおし分けて進みました。すると、中は、どこもか

しかも何千というローソクの光で照らされておりました。漁師の女房は、黄金ずくめの衣装を着て、前よりもはるかに高い玉座に座り、三重の大きな黄金の冠をかぶっておりました。女房のまわりには大勢の聖職者がいて、その両側には、ローソクが二列ならんでいました。その一番大きいものは、一番大きな塔ほどの太さと高さがあり、それから順順に小さくなつて、一番小さいものは、台所の豆ローソクほどのものでした。皇帝たちや王さまたちは、みんな女房の前にひざまずいて、女房の上履きに口づけしておりました。「おめえ」と、亭主は言つて、女房をシゲシゲと見つめました。「法王になつたのけえ。」「そうさ」と、女房は言いました。「あたしや、法王さ。」そこで、亭主は、前に歩みよつて、立ったまま女房をシゲシゲと見つめました。それは、まるでまぶしいお日さまをのぞいているような気がしました。亭主は、そうして、しばらく女房を眺めてから、言いました、「なんだな、おめえ。おめえの法王の姿は、なんてきれいなんだらな。」ところが、女房は、木のようにしゃちほこばつて、身動き一つしませんでした。そこで、亭主は言いました、「おめえな、これで満足だろ。もう法王なんだから、もうこのうえなるもんはねえぞ。」「そりや、よく考えてみましょ」と、女房は言いました。こうして、二人はベッドに入りましたが、女房は、満足しておりませんでした。欲の皮がつっぱつて眠られず、もつとなれるものはないかと、しきりに考えておりました。

亭主は、ぐつすり眠りました。亭主は、一日中やたらとかけずり回つていたのです。それにくらべて、女房の方は、ちつとも眠られずに、一晩中あつちこつちと寝がえりを打つて、もつとなれるものはないかと、ズウツツと考えつづけました。ところが、もうなんにも考えつきませんでした。そうしているうちに、日が昇りかけました。女房が赤い朝焼けに気づくと、身を起こして、ベッドのはじめで、そのようすに見ほれてしまいました。やがて、窓からお日さまが昇るところを見てみると、「そうだ」と、女房は考えました。「お日さまやお月さまを昇らせることができなにかねえ。」「あんた」と、女房は言つて、ひじで亭主のあばら骨をこづきました。「起きてさあ、ヒラメのところへ行つといでよ。あたしや、神さまの

ようになりたいんだよ。」亭主は、まだよく目がさめておりませんでした。びっくりぎょうてんして、ベッドからころげ落ちてしまいました。亭主は、聞きちがえたのだと思つて、目をこすりながら、「なんでえ、おめえ、なんて言つたんでえ」と言いました。「あんた」と、女房は言いました、「あたしやね、お日さまやお月さまを昇らせることができずにね、ただお日さまやお月さまが昇るのを眺めていただけなのはね、がまんならなんだよ。自分でさ、お日さまやお月さまを昇らせることができないうちは、もうちつとも気が落ちつかないんだよ。」こう言つて、女房が亭主を、じつにおそろしい顔でにらみつけましたので、亭主は、身の毛がよだつてしまいました。「とつとと行つといで。あたしや、神さまのようになりたいんだよ。」「なあ、おめえ」と、亭主は言つて、女房の前へひざまずいてしまいました。「そんなこと、ヒラメだつてできやしねえ。皇帝や法王にやあできるがな、おねげえだ、こらえて、法王のまんまでいてくれよ。」これを聞くと、女房は、ひどくおこりだして、髪はほぐれて、頭のまわりを乱れ飛びました。すると、女房は、その可愛い姿にもかかわらず、興奮して、亭主を足で一つ飛ばすと、大声で言いました、「あたしや、がまんできんのさ。もうこれ以上がまんできないんだよ。行つといで。」そこで、亭主は、いそいでズボンに足をつっこむと、気がいのようにかけだして行きました。

外では、嵐がゴーゴーと吹き荒れていて、漁師は、立つていられないほどでした。家家や木木が吹きたおされ、山山がゆれ動き、岩がくずれて、海の中へころげ落ちました。空は、コールタールのように真っ黒になり、かみなりが鳴り、いなづまが光りました。海は、大きな黒い波となつて、教会の塔か山のように高くせりあがりました。どの高波にも、その頭上には白い泡が王冠のようにつかつておりました。漁師は、声をはりあげましたが、自分の声すら聞こえませんでした。

「小人の、小人のティンペ・テさん、
ヒラメさん、海の中のヒラメさん、
わしの女房のイルゼビルがな、
わしの言うこと、聞かぬがな。」

「それで、おかみさん、いったいなにが欲しいんだね」と、ヒラメは言いました。「あのねえ」と、漁師は言いました、「神さまみたいになりたい、つて言うんだよ。」「うちへお帰り。おかみさん、また便所小屋のような家にいるよ。」
その家に、二人は、これまでも、そして、今日もまた住んでいます。

『七羽のカラス』（KHM二五）

あるところの男に、七人の息子がいましたが、どんなに娘が欲しいと思っても、いつこうに娘はさずかりませんでした。とうとう、おかみさんにふたたびおめでたの兆しが現れて、生まれてきたのは、願いどおりの女の子でした。その喜びはたいそうなものでしたが、けれども、その子はひよわで、小さかったので、大急ぎで間に合わせの洗礼を受けさせることになりました。おとうさんは、洗礼の水を汲んでくるよう、息子のたちの一人を、あわてて泉へ使いに出しました。残り六人の息子たちも、いっしょにかけだして、めいめいがわれ先に水を汲もうとしましたので、水瓶を井戸の中へ落とすしてしまいました。息子たちは、そこに立ったまま、どうして良いのやら分からずに、あえて帰ろうとするものもおりま

せんでした。息子たちがいつまでたつても戻ってきませんので、おとうさんは、待ちきれなくなつて、こう言いました。「あいつら、きつとまた、遊びにかまけて、忘れちまつたんだな。ろくでなしの坊主どもめ。」おとうさんは、娘が洗礼も受けずに死ぬことになるかと、気が気ではなく、腹立ちまぎれに、こう怒鳴つてしまいました。「坊主どもめ、みんなカラスになつちまえ。」この言葉を言い終えるか終えぬうちに、おとうさんは、頭上にバタバタという音を聞きましたので、上を見あげると、七羽の真つ黒なカラスが舞いあがつて、飛び去るのが見えました。

おとうさんもおかあさんも、この呪いを今さら取り消すこともできませんでした。二人は、息子たちを失つたことをたいそう悲しみましたが、それでも、かわいい娘のおかげで、いくぶん慰められました。娘は、やがて丈夫になり、日増しに美しくなりました。娘は、長い間、自分にお兄さんたちがいたことすら知らずにおりました。というのも、おとうさんもおかあさんも、息子たちのことを話さないように気をつけていたからです。とうとう、ある日のこと、ふとしたことから、人人が娘の噂をして、「あの娘は、なるほど器量良しだけれど、なんたつて、あの娘のせいで七人のお兄さんたちが不幸な目にあっているんだよねえ」、と言っているのを耳にしました。これを聞くと娘は、すっかりシヨンポリし、おとうさんとおかあさんのところへ行つて、「あたしに兄さんたちがいたの、兄さんたちはどこへ行つてしまったの?」、とたずねました。今となつては両親も、その秘密をもちや隠しておくわけにもゆかなくなつてしまいました。けれども、両親は、それは天のおぼしめしでそうなのであるから、おまえが生まれたこととはかかわりのないことだよ、と言いました。ところが、娘は、くる日もくる日も、そのことを気に病んで、自分で兄さんたちを救いださなければいけない、と思ひこむようになりました。娘は、いても立つてもおれなくなつて、とうとうこつそり家を出て、たとえどんな犠牲を払おうとも、兄さんたちをなんとか探さだして救おうと、広い世の中へと歩みだしました。娘が身につけていたものは、記念に両親からもらった小さな指輪一つと、お腹がへつたときのためのパン一個、喉が乾いたときのための小瓶一杯の水、そ

れにくたびれたときのための小さな腰かけ一つだけでした。

こうして、娘は、どんどん進んで、遠くはるかな世界の果てまでやってきました。そこで娘は、お天道さまのところに
行きました。けれど、お天道さまは、とても熱く、おまけに、恐ろしいことに、小さな子どもたちをむさぼり食っており
ました。娘は、急いでそこを立ち去って、お月さまのところへ行きましたが、けれど、お月さまは、ひどく冷たくて、ぞつ
とするほど意地悪で、娘に気づくと、こう言いました。「くさいぞ、人間の肉の臭いがするぞ。」これを聞いて娘は、すば
やく逃げ去って、お星さまのところへ行きました。お星さまたちは、娘にとっても親切で、めいめいが特別の小さなイスに
腰をかけておりました。すると、明けの明星さまが立ちあがり、娘にヒヨコの脚をわたして、こう言いました。「この脚
をもっていないと、ガラスのお山の門を開けられないよ。ガラスのお山に、おまえのお兄さんたちがいるんだからね。」

娘は、その脚を受けると、大事に布きれに包みこみ、また長いこと進んで、とうとうガラスのお山にやってきました。
門には鍵がかかっていた。そこで、娘は、ヒヨコの脚を取り出そうとしました。けれど、布きれを開くと、中は空つ
ぽでした。娘は、親切なお星さまの贈り物をなくしてしまっていたのです。さあ、どうしたら良いのでしょうか。娘は、お
兄さんたちを救い出そうと思つたのですが、ガラスのお山に入る鍵がなかったのです。心根の良い妹は、ナイフを取り
出すと、自分の小指を切り落とし、それを門の鍵に差しこみました。すると、幸いにも門の鍵は開いたのです。妹が中に
入ると、一人の小人が妹に向かってやってきて、こう言いました。「おまえさん、なにを探しているんだい。」「あだし、
兄さんたちを探しているの。七羽のガラスなのよ」と、妹は答えました。小人は、「ガラスさんたちは、お留守だよ。け
れど、戻ってくるまでここで待つつもりなら、お入りよ」と言いました。こう言つて小人は、ガラスたちの食べ物、七
つの小皿に盛り、七つの小さな杯に入れてもってきました。妹は、どのお皿からもパンを一かけ食べ、どの杯からもちよつ
ぱり飲みました。そうして、最後の杯の中に、もってきた小さな指輪を落としました。

いきなり空中でバタバタという音がし、鳴き声が聞こえたかと思うと、小人が言いました。「さあ、カラスさんたちのお帰りだよ。」まもなく、カラスたちがやってきて、飲んだり食べたりしようとして、めいめいの小皿や杯を探しました。すると、カラスは、次から次に言いました。「だれが、ぼくのお皿から食べたんだい。だれが、ぼくの杯から飲んだんだい。これは、人間の口あとだぞ。」やがて、七番目のカラスが杯を飲みほすと、小さな指輪がころげ出てきました。よく見ると、それは、おとうさんとおかあさんの指輪だと分かりました。そこで、七番目のカラスは言いました。「ぼくたちの妹がここにいるといいんだがなあ。そうすりゃ、ぼくたちは救われるのに。」戸のうしろで立ち聞きしていた妹は、この願いを耳にすると、その場へ歩み出ました。すると、カラスたちはみんな、人間の姿を取り戻しました。それから、みんな抱きあつて、おたがいにキスしあい、楽しくお家に帰りました。

『歌う骨』（KHM二八）

むかしむかし、ある国にどうもうなイノシシがいて、人人はたいへんこまっておりました。このイノシシは、お百姓さんたちの畑をほつくり返したり、家畜を殺したり、その牙で人の体を引きさいたりしました。そこで、王さまは、この災難から国を救ってくれる者にはだれにでも、たくさんごほうびを出す約束なさいました。けれど、このけものは、とても大きくて強いので、だれ一人として、イノシシのすんでいる森に近づく勇氣がありませんでした。とうとう王さまは、このイノシシを生け捕りにするか、しとめるかした者には、自分の一人娘をお嫁に与える、というおふれを出させました。ところで、この国には二人の兄弟がおりました。まずしい男の息子たちでしたが、この二人が名のりでて、この危険な

大仕事を引き受けましょう、と言いました。兄のほうは、ずるがしこく抜けめがありませんでしたので、思いあがった気持ちから引き受けたのですが、弟のほうは、無邪気なおバカさんでしたので、お人好しから引き受けたのでした。王さまは、「そちたちは、あのけものをぬかりなく見つけられるよう、それぞれ反対側から森に入るがよい」と言いました。そこで、兄のほうは西側から、弟のほうは東側から森の中に入りました。弟がちよつと進むと、一人の小人がやってきました。その小人は、一本の黒い槍を手にもちながら、「この槍をおまえにあげるよ。おまえの心は汚れなく、氣立てがよいからな。これをもてば、安心してイノシシに立ち向かえるさ。それでケガをすることもないよ」と言いました。弟は、小人にお礼を言い、槍を肩にかついで、こわがりもせず、ずんずん進んで行きました。まもなく弟は、イノシシを見つけた。イノシシは、弟めがけて突進しましたが、弟がイノシシに槍を突きつけると、イノシシは怒り狂って、盲めっぽう槍に突つかかって、イノシシの心臓は槍で串ざしになってしまいました。そこで、弟は、この怪物を肩にかついで、家に帰り、王さまにさし出すつもりでおりました。

弟が森の反対側から出てきたとき、その森の入口には一軒の家があつて、そこで人人は、飲めや踊れやのどんちゃん騒ぎをしておりました。兄のほうは、イノシシはどうせ逃げやしないと考へて、まずは一杯景気をつけようと、その家に入つたのでした。ところが、兄は、獲物をついで森から出てくる弟の姿を見ると、ねたみと悪だくみかられて、心が休まりませんでした。兄は、弟に向かつて大声で言いました。「おーい、兄弟、中に入れよ。ゆつくり休んで、一杯やって元氣をつけろよ。」その言葉の裏にもや悪だくみなどひそんでいようとは思ひもよらない弟は、中に入って、親切な小人が自分に槍をくれたので、それでイノシシをしとめたことを兄に教えました。兄は、弟を晩までそこに引きとめておいて、それからいっしょに出かけました。ところが、二人が暗がりを小川にかかつている橋のたもとまでやっていると、兄は弟を先に渡らせ、弟が小川の真ん中にさしかかったところで、弟を背後からなぐりつけましたので、弟は川に落ちて死んで

しまいました。兄は、弟を橋の下に埋め、それからイノシシをかつぐと、それを自分がしとめたといつわつて、王さまにさし出しました。そのごほうびに兄は、王さまのお姫さまをお嫁にもらいました。弟のほうがいっこうに帰つてこないとみると、兄は「イノシシが弟の体を引きさいてしまったのかも知れん」と言いましたので、だれもがそれを信じてしまいました。

ところが、神さまの前で隠し通せるものはなにもありませんので、この邪悪な行ないも明るみにでることとなりました。それから長い年月がたつて、あるとき一人の羊飼いが羊の群れを追い立てながら、この橋を渡りました。羊飼いは、橋の下に砂の中に雪のように白い小さな骨を見つけると、これは良い歌口になるかも知れない、と考えました。そこで、羊飼いは、下へおりて行って、それを拾いあげると、それをけずつて自分の角笛の歌口をこしらえました。羊飼いがその角笛を初めて吹いてみると、その歌口の小さな骨がひとりで歌い始めましたので、羊飼いはひどく驚いてしまいました。

「ああ、心ある羊飼いさん、

おいらの骨を吹くおまえさん、

兄貴がおいらを殺してさ、

橋の下に埋めたのさ、

イノシシを退治して、

王さまのお姫さまもらいたくて。」

「なんと奇妙な角笛だ」と、羊飼いは言いました。「ひとりでに唄を歌うなんて。こりゃあ、ひとつ王さまにさしださなきゃ

あーならん。」羊飼いがそれをもって王さまの前まえに出ると、その歌口の骨は、またしても例れいの唄を歌い始めました。王さまにはその意味いみがよく分わかりましたので、王さまは、橋の下の地面じめんを掘り返かえさせました。すると、殺ころされた弟の骸骨がいこつがまると出てきました。邪悪じやあくな兄あには、自分じぶんの行おこないを認めみとざるをえませんでしたので、袋すくろに縫ぬいこまれて、生きながら溺死できしさせられました。たほう、殺された弟の遺骨いこつは、墓地ぼちへ移うつされ、りっぱなお墓はかに入れられて、とわの眠りねむにつきました。

『かしこいエルゼ』（KHM三四）

むかしむかし、あるところに一人ひとりの男おとこがおりました。この男には一人の娘むすめがあつて、その名を「かしこいエルゼ」と言いいました。この娘が一人前いちじんまえになると、父親ちちおやは言いいました。「娘を嫁よめにやろうじゃないか。」母親ははおやは、「ええ、娘を欲ほしいという人ひとがきさえすればね。」とうとう遠くからハンスという人ひとがやってきて、娘を嫁よめに欲ほしいと言いいました。この男は、かしこいエルゼがほんとかしこければという条件じちけんをつけたのです。「そりやもう、娘は利発りはつな子こです」と、父親は言いいました。すると母親は、「そうですとも、娘には通とおりを吹ふきぬける風かぜが見みえますし、それに、ハエの咳せきが聞こえるんですよ」と言いいました。「いいでしょ、もし、娘さんがほんとかしこくなければ、お嫁よめにもらいませんですよ」と、ハンスは言いいました。さて、みんなで食卓しょくたくについて、ご飯はんがすむと、母親が言いいました。「エルゼや、地下室ちかしつに行いって、ビールをもつてきてちょうだい。」すると、かしこいエルゼは、壁かべにかかっていたジョッキを取とって、地下室ちかしつへ行ゆきましたが、とちゆうで退屈たいくつしのぎにジョッキのふたを勢いきまよくパタンパタンと鳴なりました。地下室ちかしつに入はいるとエルゼは、小さなイスをもつてきて、ビール樽だるの前まえに置おきました。こうすれば、腰こしをかがる必要ひつようもありませんし、背せなか中なかを痛いためたりして、思おもい

がけないけがもせずにはむからです。そうしてエルゼは、ジョッキを手前にすえて、樽の栓をあげました。そして、ビールが流れこんでいる間にも、エルゼは目を遊ばせておこうとせず、壁の上の方を見ました。あちこちキョロキョロ見回しているうちに、自分の真上のところに、左官屋がうっかり壁にさしたまま置き忘れていたツルハシが目にとまりました。これを見ると、かしこいエルゼは、泣きだして、こう言いました。「あたしがハンスといっしよになると、子どもができるわ。子どもが大きくなくて、子どもをこの地下室へビールを汲みにやると、このツルハシが子どもの頭へおっこちて、子どもを打ち殺してしまふんだわ。」エルゼはそこに座つて、さしせまる災難のことを考えて、ありつたけの力で泣きわめいていました。上にいる人たちは、飲み物を待つていましたが、しかし、かしこいエルゼは、いつまで待つても戻ってきませんでした。そこで、おかみさんは、女中に言いました。「地下室へ行つて、エルゼがどこにいるのか見てきてちょうだい。」女中が行つてみると、エルゼはビール樽の前に座つて、大声で泣きわめいていました。「エルゼさん、なんで泣いてらっしゃるの」と、女中はたずねました。「ああ、これが泣かずにいられますよか。あたしがハンスといっしよになると、子どもができるわ。子どもが大きくなくて、子どもを地下室にビールを汲みにやるでしょ。すると、あのツルハシが子どもの頭へおっこちて、子どもを打ち殺してしまふかも知れないわ。」これを聞くと女中は、「エルゼさんは、なんてかしこいんでしよう！」と言って、エルゼのそばに座つて、災難を案じて、いっしよに泣きだしました。しばらくたっても女中は戻ってきませんし、上にいる人たちはのがかわいて飲み物が欲しくなりましたので、亭主は下男に言いました。「地下室へ行つて、エルゼと女中がどこにいるのか見てきてくれ。」下男は、地下室へおりて行きました。すると、かしこいエルゼと女中は、二人とも泣いておりました。そこで下男は、こうたずねました。「いっさい、なんで二人とも泣いていなさるか。」「ああ、これが泣かずにおられますよか」と、エルゼは言いました、「あたしがハンスといっしよになると、子どもができるわ。子どもが大きくなくて、子どもをこの地下室へビールを汲みにやると、このツルハシが子どもの頭へ

おっこちて、子どもを打ち殺してしまうんだわ。」これを聞くと下男は、エルゼさんは、なんてかしいんだらう！」と言つて、大声で泣きわめきました。上では、みんなで下男を待っていました。しかし、いつまでたつても下男は戻ってきませんでしたので、亭主は女房に言いました。「地下室へ行つて、エルゼがどこにいるのか見てきてくれよ。」おかみさんは、地下室へおりて行くと、三人そろつて泣きわめいているので、そのわけをたずねました。するとエルゼは、これから生まれる子どもが、ようやく育つたというのに、きつとビールを汲みにやらせられ、あのツルハシがおっこちてきて、それで打ち殺されるでしょう、と話しました。これを聞くと母親も、「ああ、エルゼはなんてかしいんだらう！」と言つて、エルゼのそばに座つて、いっしょに泣きだしました。上にいる亭主は、さらにしばらく待つていました。ところが、女房は戻つてこず、亭主ののどのかわきは、どんどんひどくなつてきたので、「こりやあ、自分で下に行つて、エルゼがどこにいるのか見てこなくちゃならんな」と言いました。亭主が地下室へおりて行くと、みんなそこに並んで座つて、泣いておりました。そのわけは、エルゼがいつの日か子どもを産むかも知れないし、また、子どもがビールを汲みに行ったちようどそのときに、座つている子どもの頭にツルハシが落つこちて、それで子どもが打ち殺されるかも知れないということでしたが、亭主はこれを聞きますと、「エルゼは、なんでかしいんだらう！」と大声で言うのと、座りこんで、これまたいっしょに泣きだしました。婿どののは、上で長いこと独りでおりました。いっこうにだれも戻つてこないので、婿どののは「みんな下でおいらを待つているのだらう。おいらも行つて、みんながなにをしているか見てみなくちゃな」と言いました。婿どのが下へおりて行くと、五人がそこに座つて、わめいたり嘆き悲しんだりするようすは、ひどくあわれでしたが、順繰りに元氣を取り戻していました。「いっつたい、どんなご不幸が起きたというのでしょうか」と、婿どののはたずねました。「ああ、ハンスさん」と、エルゼは言いました、「あたしたちが結婚していっしょになると、子どもができて、そうして、子どもが大きくなると、地下室へビールを汲みにやるかも知れませんか。そのとき、あの壁の上の方につき

ささったままになっているツルハシがおっこちてきて、子どもの頭を打ちくだいて、子どもはそれつきりになってしまいかも知れないわ。それが泣かずにおられましょか。」「いいでしょ」と、ハンスは言いました。「おいらの家をとりしきるには、それいじょうの分別はいらないよ。あなたはほんとにかしいエルゼさんだから、もらうことにましょ。」「ハンスは、エルゼの手を取って、上へ行って結婚式をあげました。

エルゼがハンスといっしょになってしばらくすると、ハンスは言いました。「エルゼ、おいらは出かけて、働いてお金をかせいでこよう。おまえは、畑へ行行って、麦を刈ってきてくれ。パンを食べれるようにな。」「分かりました、旦那さま、そうましょ。」「ハンスが出かけると、エルゼはおいしいおかゆをこしらえて、それをもつて畑に出かけました。畑に着くとエルゼは、ひとりごとを言いました。「なにをしようかしら。麦を刈りましょか、それともおかゆをたべましょか。そうね、まじはおかゆを食べましょ。」「こう考えてエルゼは、鍋のおかゆをすっかり食べ終えて、満腹になると、またもや言いました。「なにをしようかしら。麦を刈りましょか、それとも一眠りましょか。そうね、まじは寝ましょ。」「こう考えてエルゼは、麦の中に寝ころんで、眠りこんでしまいました。ハンスは、とつくに家に帰ってきていましたが、ところがエルゼは、いっこうに帰ってくるけはいもありませんでした。そこで、ハンスは言いました。「なんてかしいエルゼなんだろう。働きのあまり、家に帰って飯さえ食べないなんて。」「しかし、エルゼがいつまでたつても出かけたままで、日が暮れましたので、ハンスは出かけて行って、どれだけ麦を刈ったのか見てみようと思ひました。ところが、麦一本刈られていないどころか、エルゼは麦の中に寝ころんで、眠っているのです。そこでハンスは、大急ぎで家に帰ると、小さな鈴がいくつもついた捕鳥網を取ってきて、それでエルゼの体を包みこみました。それでも、エルゼはあい変わらず眠り続けていました。それからハンスは、走って家に帰り、入口の戸に鍵をかけ、イスに腰かけて、仕事をしておりました。もう真つ暗になってしまったとき、とうとうかしいエルゼは、目を覚まして立ちあがると、体のあちこちでガラガラと

いう音が鳴り、歩きたびに鈴の音が聞こえました。そこで、エルゼはびっくりし、自分がほんとかしこいエルゼかどうか分からなくなつて、こう言いました。「あたしはかきこいのか、それともかきこくのかしら。」ところがエルゼは、自分でそれにどう答えて良いものやら分かりませんでしたので、しばらく迷つて、つつ立っていました。とうとう、エルゼは考えました。「家に帰つて、あたしがかきこいのか、かきこくのか、たずねてみよう。家の人たちなら知つてるでしょうから。」エルゼが走つて家の入口まで行くと、入口の戸はしまっていました。そこでエルゼは、窓をコンコン叩いて、大声で言いました。「ハンスさん、エルゼは中にいますか。」「いるよ」と、ハンスは答えました、「エルゼはうちにいるよ。」すると、エルゼはぎょうてんして、「ああ神さま、それじゃあたしはエルゼじゃないのね」と言つて、よその家の入口へ行きました。けれど、よその人たちも、鈴がガラガラ鳴るのを聞きつけますと、戸をあけようとしませんでしたので、エルゼはどこにも泊めてもらえませんでした。そこでエルゼは、急いで村から逃げだしたので、それっきりだれもエルゼの姿を見た者はありませんでした。

『ツグミのひげの王さま』(KHM五二)

あるところの王さまに、一人の娘がおりました。娘は、なみはずれて美しかったです、とても気位が高く、思いあがつておりましたので、どんな人が結婚を申しこんでも、満足しませんでした。娘は、結婚を申しこんだ人を次から次へとはねつけ、そのうえ、その人たちを笑ひものにするのでした。あるとき、王さまは、大きな宴会を開かせて、その席に娘と結婚したいと思う人人を、近い国からも遠い国からも、招待しました。求婚者たちは、身分におうじて、全員一列に

ならばされました。最初は王さまたち、次には公爵、侯爵、伯爵、男爵、最後には貴族たちがならびました。すると、お姫さまは、その列の間を案内されましたが、お姫さまは、どの人のところでも、なにかしらのケチをつけなければ気がすみませんでした。最初の人は、太りすぎていました。お姫さまは、「酒だるね！」と言いました。次の人は、背が高すぎました。「背高のつぽは、風に吹かれて、ふうらふうら。」三番目の人は、背が低すぎました。「ちびのでぶっちは、ぶきっちよよ。」四番目の人は、ひどく青白い顔をしておりました。「青ざめた死に神さんね。」五番目の人は、血色がよすぎました。「真つ赤なトサカのオンドリね！」六番目の人は、背中が曲がっておりました。「かまどのうしろで乾かした生木だわ！」このように、お姫さまは、どの人のところでも、なにかしらケチをつけずには気がすみませんでした。なかでも、かなり上の席にいた、礼儀正しい王さまを、この王さまのアゴが、ちよつとしゃくられていたものですから、からかいました。「おやまあ」と、お姫さまは叫んで、笑いました。「この人のアゴは、まるでツグミのくちばしだわ。」このときいろいろの王さまは、「ツグミのひげ」というあだ名をもらってしまいました。けれど、年老いた王さまは、お姫さまが、人人をからかうばかりで、せっかくお城に集まった求婚者たちを全員はずかしたのを見ると、腹を立てて、おまえなんか、城のどの戸口であろうが、まっさきにやってきた乞食にくれてやる、ときっぱりと断言したのです。

それから二、三日すると、一人の旅芸人がやってきて、心ばかりのほどこしを受けるために、お城の窓の下で、唄を歌い始めました。王さまは、これを聞くと、言いました。「あのものを、上に通すがよい。」すると、旅芸人は、きたない、ぼろぼろの身なりのままで、部屋の中に入ってきて、王さまとお姫さまの前で唄を歌い、それが終わると、ほどこしものを求めました。王さまは、言いました。「おまえの唄は、大いにわしの気に入ったから、わしはおまえに、ここにいるわしの娘を妻としてあげよう。」お姫さまは、びっくりぎょうてんしましたが、それでも、王さまは言いました。「わしは、まっさきにやってきた乞食におまえをやる誓いをたてたのじゃ。この誓いを、わしは守るつもりじゃよ。」お姫さまが、

どんなに反対しても、むだでした。牧師がつれてこられ、お姫さまは、すぐさま旅芸人と結婚させられました。それが終わると、王さまは言いました。「さあ、乞食の女房となったおまえが、もうこれいじょうわしの城にいるのは、おかしかろ。亭主といっしょに出て行くがよい。」

乞食は、お姫さまの手をとって、お城の外へとつれだしました。お姫さまは、乞食とともに、自分の足で歩いて行かねばなりません。大きな森に入ると、お姫さまは、たずねました。

「まあ、このみごとな森は、どなたのものかしら？」

「こりゃあ、ツグミのひげの王さまのものさ。あの方と結婚してりゃあ、こりゃあおめえのものなのに。」

「あたしって、あわれなお姫さまね、

ああ、結婚してりゃよかった、あのツグミのひげの王さまとね！」

それから、二人は、野原をこえてゆくと、お姫さまは、またたずねました。

「まあ、このみごとな緑の野原は、どなたのものかしら？」

「こりゃあ、ツグミのひげの王さまのものさ。あの方と結婚してりゃあ、こりゃあおめえのものなのに。」

「あたしって、あわれなお姫さまね、

ああ、結婚してりゃよかった、あのツグミのひげの王さまとね！」

それから、二人は、大きな街を通りぬけると、お姫さまは、またたずねました。

「まあ、この大きな街は、どなたのものかしら？」

「こりゃあ、ツグミのひげの王さまのものさ。あの方と結婚してりゃあ、こりゃあおめえのものなのに。」

「あたしつて、あわれなお姫さまね、

ああ、結婚してりゃよかった、あのツグミのひげの王さまとね！」

「てんで気に入らねえな」と、旅芸人は言いました。「おめえは、いつだって、ほかのやつを亭主にしたがるんだからな。このおれじゃ、ものたりんのか？」

とうとう、二人は、とても小さな家にたどりつくと、お姫さまは言いました。

「ああ、このお家、なんて小さいんでしょうね！」

このみすぼらしい、ちっぽけなお家は、どなたのものなんでしょうね？」

旅芸人は、答えました。「こりゃあ、おれとおめえの家だよ。おれたちゃあ、ここですしよにくらすんだ。」その低い戸口から入るために、お姫さまは、身をかがめなければなりません。「召使いたちは、どこにいるのかしら？」と、お姫さまは言いました。「召使いだつてえ！」と、乞食は答えました。「してえもれえてえことあな、おめえが自分でしな

きやあならんのさ。さあ、火をおこし、湯をわかして、おれの飯イ作つてくれ。おりやあ、もうへとへとだ。」けれど、お姫さまは、火おこしや煮炊きなど、まるで分かりませんでしたので、乞食は、自分でやって、なんとか食べれるものを作りあげました。味気のない食事を終えると、二人は、床につきました。しかし、朝になると、乞食は、まだ朝も早いうちから、家の仕事をせにやならん、と言つて、お姫さまをたたきおこしました。数日の間、二人は、このようにして、どうにかこうにかくらししているうちに、たくわえているものを食べつくしてしまいました。「おめえな、おれたちや、こうやって食べてばっかしで、なんにもかせがねえつてのはな、もうこれいじよう続きっこねえ。おめえがな、カゴ編むんだ。」亭主は、外へ出て、ヤナギの枝を切つて、家へもつてきました。そこで、お姫さまは、カゴ編みを始めましたが、かたいヤナギの枝が、お姫さまのきゃしゃな手に刺さつて、両手はキズついてしまいました。「こりやあ、ダメだな」と、亭主は言いました。「それより、糸をつむいでみな。そっちの方が、うまくゆくかも知れねえ。」お姫さまは、糸車の前に座つて、糸をつむごうとためしてみましたが、粗い糸がまもなくお姫さまのやわらかな指にくいこんで、そこから血がしたたり落ちました。「まったくなあ」と、亭主が言いました。「おめえは、なんの役にもたちやあしねえ。おめえといつしよになつて、ひでえめに会つたよ。今度は、壺や食器を売る商売をしてみよう。おめえがな、市場に座つて、品物売るんだ。」「どうしましよ」と、お姫さまは思いました。「もし、おとうさまの国の人たちが、市場にやってきて、あたしがそこに座つて物売りしている姿を見たら、あたしをひどく笑ひものにするんでしように。」とはいつても、どうにもなりません。たて、飢え死にしたくなければ、言われた通りにするしかありませんでした。最初、商売はうまくゆきました。というのも、女が美しかったものですから、人人は喜んで女の品物を買ひ取り、言い値通りのお金を払つてくれました。それどころか、多くのお客たちは、女にお金をおいていったうえに、買ひ取つた壺までおいていったのです。さて、二人は、もうけたお金があるうちは、それでくらししておりましたが、亭主がまたたくさんの新しい食器を仕入れてきました。女は、それをもつ

て出かけ、市場の角に座つて、身のまわりに品物を並べて、売っておりまして。そのとき、とつぜん、馬にのつた一人の酔っぱらった軽騎兵が、かけつけてきて、並べた壺の中へまっしぐらに飛びこんでしまいましたので、壺という壺は、みんなこなごなにくだけ散つてしまいました。女は、泣きだしてしまいました。心配のあまり、どうしてよいものやら分かりませんでした。「ああ、あとでひどいめに会うわ！」と、女は叫びました。「このことを主人が知ったら、どんなにひどいことをおっしゃるやら！」女は、走つて家に帰り、亭主にこの災難を話しました。「壺や食器売るつてえのに、市場の角つこに陣取るやつがあるかよお！」と、亭主は言いました。「泣くのは、やめろ。おめえが、まっとうな仕事にや役立たねえつてことは、よく分かつたよ。おれがな、王さまのお城にいつて、料理手伝いの女中は、入り用でござんせんかつてえ聞いたらな、お城の人たちやあ、おめえを置いてえつて、言つてくれるじゃあねえか。ありがてえこつた。おめえな、ただで飯イくえるぜ。」

さて、お姫さまは、料理手伝いの女中として、料理番の手足となつていちばんきつい仕事をしなければなりません。た。お姫さまは、首からつるした左右の袋に、それぞれ一つずつ小さな壺をしまいこみ、分けてもらった残り物を、この壺の中へ入れて、家へもち帰り、二人は、これを食べてくらしておりました。あるとき、王さまのご長男の婚禮の式が祝われることになりましたので、このあわれな女は、上の階へあがり、大広間の戸口の前に立つて、中のようなすを眺めようと思ひました。いよいよ、たくさんのローソクに火がともされて、次から次へと入ってくる人人の身なりが、どんどん美しくなり、大広間全体が、きらびやかに華やいでくると、女は、すっかり悲しい気分になつて、それにつれ自分の悲運が思われ、自分をおとしめ、これほどまでの貧乏につき落とした、自分の気位の高さと思ひあがりを感じました。大広間へ運びこまれたり、運びだされたりする、すばらしい料理から、おいしそうなおいが、女の方へただよつてきました。召使いたちが、ときどきその料理を二、三切れ女に投げあたえると、女は、それを自分の小さな壺に入れて、家へもち帰る

つもりでおりました。そのとき、とつぜん、王子さまが大広間の中へ入ってきました。王子さまは、豪華な衣装に身をつつみ、首には金のクサリをかけていました。王子さまは、美しい女が戸口に立っているのを見ると、女の手を取って、踊りの相手として申しこみました。女は、おことわりしましたが、そのとき、びっくりぎょうてんしてしまいました。というのも、その王子さまとは、自分に結婚を申しこんだのに、からかつてはねつけてしまった、あの「ツグミのひげの王さま」だと分かったからです。女がさからつても、むだでした。王子さまは、女を大広間の中へひっぱりこみました。すると、左右の袋をつるしていたヒモが千切れ、中から壺が飛び出て、床に落ち、スूपやらパン切れ、料理の切れはしやらが、一面に飛び散ってしまいました。いあわせた人人は、これを見ると、みんなどつと笑い、そのそそをからかいましたので、女は、とても恥ずかしくなつて、心底、穴があつたら入りたい、と思ひました。女は、戸口から飛び出て、逃げようとする、階段のところ、一人の男に追いつかれてしまい、また大広間へつれもどされてしまいました。そして、女が、その男の顔を見ると、それはまたしても、ツグミのひげの王さまなのでした。ツグミのひげの王さまは、女にむかつて、やさしく言いました。「こわがらなくていいよ。おまえといつしよに、あのみすぼらしい小屋でくらしていた旅芸人は、このわたしだったのだよ。おまえを愛していたからこそ、あんな変装をしたのさ。おまえの壺を馬でけ散らした、あの軽騎兵も、このわたしだったのさ。それもこれも、みんな、おまえの気位の高いところをくじき、わたしを笑ひものにしたおまえの思いあがりをこらしめるために、しくんだことなのだよ。」これを聞くと、女は、はげしく泣いて、言いました。「わたくしは、とんでもないあやまちをおかしました。ですから、わたくしは、あなたの妻となるに値いたしません。」ツグミのひげの王さまは、言いました。「元気をだしなさい。いやな日は、終わったのだ。さあ、わたしたちの結婚をお祝いしよう。」すると、侍女たちがやってくる、女にいちばん豪華な衣装を着せました。やがて、お姫さまのおとうさまやお城の家来たちが、こぞつてやってくる、お姫さまとツグミのひげの王さまとの結婚を祝福しました。こうして、ほ

んとうの喜びは、今ようやく始まりました。わたしもあなたも、その場にいあわせたかったものですね。

注

この翻訳の底本は、*Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. 3 Bde., Philipp Reclam jun. GmbH & Co., Stuttgart 1980* である。

訳者は、『グリム童話翻訳の歴史的外観―著者による童話八編の新訳と共に―』と題して、平成二二(二〇〇〇)年に、すでにグリム童話の新訳を呈示した。その後、『新訳グリム童話四編―KHM九、一一、一二、一五―』と題して、平成一六(二〇〇四)年にグリム童話四編の新訳を呈示した。今回が、第三回目の新訳で五編を呈示した。その翻訳の方針は、前回と同様で、「適宜ルビをふった」。

次回で新訳の試みは、一応終了する予定である。この機会に、「グリム兄弟と童話集に関するメモ」をここに記載しておく。

グリム兄弟と『グリム童話集』について

(1) 父親、法律家、ファイリップ・ヴィルヘルム・グリム (1751-96)

母親、ドロテア (旧姓ツインマー、1755-1808)

ハーナウに住む。一二年間の間に九人の子どもを産む。成人したのは、六人。

(2) ヤーコプ・ルートヴィヒ・グリム (1785-1863、七八歳)

ヴィルヘルム・カール・グリム (1786-1859、七三歳)

カール・フリードリヒ・グリム (1787-1852)

フェルディナント・フィリップ・グリム (1788-1844)

ルートヴィヒ・エーミール・グリム (1790-1863)

シャルロツテ・アマリーエ(ロツテ)・グリム(1793-1833)

(3) 一七九一年、カッセル近郊のシュタイナウに移り住む。父親は、そこで行政司法官となる。「正しく生きれば間違いなし」(Tute si recte vixeris)。一七九六年、父親肺炎にかかり、四四歳で急逝する。経済的に困窮。

(4) 援助者、祖父ヨハネス・ヘルマン・ツインマーと伯母ヘンリエッテ・ツインマー。この伯母は、ヘッセン選帝侯夫人の女官長であった。ヤーコプとヴィルヘルムを、カッセルの名門リュツエーウム(古典語高等中学校)に入る。ヤーコプは一八〇二年、ヴィルヘルムは一八〇三年、クラスの首席で卒業。ヤーコプ、マールブルク大学入学。奨学金を受けられなかった。その一年後に、ヴィルヘルム入学。

(5) ヤーコプ、新進気鋭の法学者で、歴史法学の創始者のフリードリヒ・カール・フォン・ザヴィニーに学ぶ。ザヴィニーの主張、「法の精神を理解するためには、一民族が共有する慣習や言語の発展の中に法の起源を探り、法の発展の背後にある変転する歴史的文脈を探求しなければならない。」法の言語的・歴史的側面を強調。これによって、グリム兄弟は、ドイツの古い文学や民間伝承の研究に専念することとなる。

(6) ヤーコプ、一八〇五年、ローマ法制史研究の助手として、ザヴィニーに随行してパリへ行く。

一八〇六年、法学を捨てる。言語学者・文学者になる決意をかためる。カッセルへ戻る。フランスとの紛争調停をはかるヘッセン国陸軍省の書記補となる。

(7) 経済的に苦しい生活。ルートヴィヒは画家となる。カール、語学教師として貧困のうちに生涯を終える。フェルディナント、出版関係の仕事転々とし、貧困のうちに世を去る。ロツテ、一八二二年、ルートヴィヒ・ハッセンプフルク(後に政治家となる)と結婚する。

(8) 一八〇六年から一八一〇年にかけて、クレーメンス・ブレンターノから童話収集の仕事依頼される。

一八〇七年、ヤーコプ陸軍省の仕事を失う。カッセル、フランス軍に侵攻される。一八〇八年、ヤーコプは、カッセルのジェローム王直属の司書職に就く。

一八一二年、学術的註釈のついた『子どもと家庭のための童話集』（第一巻）出版。ナポレオンの敗北。

一八一四年、ヤーコプ、ヘッセン国平和使節団の一員に任命される。パリとウィーンで外交官として働く。ヴィルヘルム、カッセルの選帝侯図書館の書記となり、一八一五年、『子どもと家庭のための童話集』（第二巻）出版。

(9) ヤーコプ、カッセルの選帝侯図書館の次席司書官の地位に就く。

一八二五年、ヴィルヘルム、カッセルの薬局の娘ドルトヒエン・ヴィルトと結婚し、三人の子どもをもうける。ヤーコプも同じ家で生活する。

(10) 一八二九年、カッセルの選帝侯図書館の首席司書官（図書館長）ルートヴィヒ・フェルケルが死ぬ。ヤーコプはこの地位を望んだ。選帝侯によって拒否される。ヤーコプとヴィルヘルムは、司書官の職を辞す。一年後、ゲッティンゲンに行き、ヤーコプは大学のドイツ古文学担当教授兼首席司書官となる。ヴィルヘルムは、副司書官となり、一八三五年、教授となる。

(11) 一八三七年、エルンスト・アウグスト三世が悪評と共にイギリスからやってくる。ハノーファア王位を継承。一八三三年の憲法破棄、議會を解散させる。「ゲッティンゲン七教授追放事件」。カッセルに戻る。アルニム、プロイセンの新国王フリードリヒ・ヴィルヘルム四世を説得。

ベルリン大学教授ザヴィニーも援助。一八四〇年、ヤーコプとヴィルヘルムは、ベルリン大学教授となる。

(12) 一八四九年、グリム兄弟、国民議会の議員に選ばれる。ヤーコプ、一八四八年、教授の職を辞す。一八五二年、ヴィルヘルム、教授の職を辞す。『ドイツ語辞典』の作成に精力を注ぐ。Fまで辿り着く。全二六巻、三三二冊。

(13) 話の提供者たち。カッセルでは、ヴィルト家の母親（カテリーナ）と若い娘たち（ドルトヒエン、グレートヒエン、リゼッテ、マリー・エリーザベート）と、ハッセンプフルーク家の若い娘たち（アマリーエ、ジャネット、マリー）。

一八〇八年、ヤーコプは、ヴェストファーレン出身のヴェルナー・フォン・ハクストハウゼンと親しくなる。

一八一一年、ヴィルヘルムがハクストハウゼンの領地を訪ねて、そこで知り合った若い男女（ハクストハウゼン家のルドヴィーネ、マリアンネ、アウグストと、ドロステルヒュルスホフ家のイエンニー、アネッテ）が語る話を記録する。大半の話は、ヘッセンの人から聞いたもの。ドロテア・フィーマン（カッセル近郊のツヴェーレンの仕立屋の妻）、カッセルに果物を売りにきて、グリム兄弟の家で話をした。退役軍人のヨーハン・フリードリヒ・クラウゼ、古着をもらったお札に話を聞かせた。グリム兄弟の童話は、多くはフランス起源のもの。グリム兄弟の妹ロッテは、一八二二年にルートヴィヒ・ハッセンプフルークと結婚する。ハッセンプフルーク家は、ユグノーの末裔であった。

(14) 一八一〇年、ブレンターノはグリム兄弟に収集した話を送って欲しいと依頼する。兄弟は、写しを取った上で、四九の話を送る。ブレンターノは、それらの話をもとに、全く違った童話を作ろうとしていた。グリム兄弟は、「集めた話を、ドイツ民族の慣習と慣例をめぐる基本的真実を記録した資料として用いたい、また、口承伝統と自分たちを結びつける絆として保存しておきたい」と考えていた。ブレンターノは、それらの話を使用せず、アルザスのエーレンベルク修道院に忘れてきてしまった。

一九二〇年、手書き原稿が発見される。一九二四年、一九二七年、一九七四年に出版されている。

(15) 『グリム童話集』と聞くと、なにかしら現在あるような形で、初めから一定数の童話が収録されていたかのような印象を与えるが、しかし、この童話集は、一八一二年に初版第一巻が、続いて一八一五年に初版第二巻が出版されて以来、一八五七年に第七巻が出版されるまでに、その童話の収録数ばかりではなく、かなりの童話は、文体上・内容上の修正を施されている。それどころか、初版以降削除された童話や新たに追加された童話も少なからず存在している。ちなみに、初版以降の収録童話数を列挙すれば、次の通りである。

初版（第一巻一八一二年、第二巻一八一五年） 一五六話

第二版（一八一九年）

一六一（+ 5）

第三版 (一八三七年)	一六一 (+ 7)
第四版 (一八四〇年)	一七八 (+ 10)
第五版 (一八四三年)	一九四 (+ 16)
第六版 (一八五〇年)	二〇〇 (+ 6)
第七版 (一八五七年)	二〇〇 (+ 0)

グリム兄弟が、ゲルマン民族の文学的遺産と言える『子どもと家庭のための童話』を収集し始めて以来、初版における一五六という収録数は、最終の第版において、二〇〇という区切りの良い収録数になっている。グリム兄弟が、区切りの良い二〇〇という収録数を意図的にめざしたということは、十分に納得のゆくことである。収録数の変遷を見ると、初版から第七版までの間において、第五版における一六という童話の追加数が最も大きいことが分かる。